

船揃 (風流船揃)

安政三年二月 作曲 二代目 杵屋勝三郎

そもそも船の始まりは、唐の皇帝に仕えていた貨狄という臣下がいてね、秋吹く風に庭の池へ柳の葉が一枚浮んでいたのを見たわけ。葉の上には蜘蛛が乗っていて、細蟹のような小さな蜘蛛が糸を引いて水の上を進んでゆく姿を見て閃いて、色々工夫をして作ったのが船なんだってさ。

見渡せば海原は遠くにあり、追い風、横風に帆をあげて行き交う船の数々が、霞にかかって見え隠れしているよ。白波が打ち寄せる磯の近くには、千鳥鷗が浮いているなあ。四つ手網を引く船や釣り船が、連れだつて漕いでゆく、そんなのどかな春景色って、良いよなあ。

筑波山の峰から落ちた水筋も、秩父山から流れ来る水も積もり積もって隅田川の清き流れとなっているんだ。

揃える船は、月見だ、花見だ、と云って隅田川に漕ぎ出す屋形船、吉原通いの猪牙船、荷物を運ぶ荷足船、御厩河岸に行く渡し船、てなもんだ。

おつ、遠か向こうで「吉原交通さあん」って女将が叫んでるぞ。あれは、新吉原の山谷の堀から迎え船を呼んでるのか。こっちは、盛況で「指名待ち」になっている待合茶屋がある向島に、花見の船を出すのか。

おやつ、軒を並べた屋形船の簾の内、聞き覚えのある爪弾きは、もしかして、ちよ美さんじゃなろうか。気をもみ、内心それと分かったら、もう、追い風に吹かれて着物の紅い裏地も見えちゃったりするようで、気が気じゃないよ。

ちよつと待てーと、

「吹けよ川風 あがれよ簾、中の芸者の顔みたや」と急がせたが「佃々といそいで押せば、汐が逆りて櫓が立たぬ」と、満ちくる潮に押されて櫓を押してもなかなか進まない。また上流から二挺三味線を弾きながら船が来たよ。

「山谷堀から来るあなた、三夜の空の三日月みたい、宵にちらりと会ってお別れ、つれないのね」って、唄ってる。

ちよ美さんと負けず劣らずの、良い声だなあ。ああ、七重さんか？行き合いの船の横から三味線と二挺鼓を打たれたら現の浪は船を打つ、てな具合だな。

「元々俺たちや都の生まれ、恋した相手にそそのかされて、こんな姿になっちゃったー」
美味しい酒は多いけど、聞いてびっくり、丸々、盃三杯、ついつい ついのついでって呑んじゃった。

右へ、左へ、とキヤーキヤー言いながら舵が揺れ、乗ってるお客の気も浮かれ、随分お酒もすすんだようだ。

罰ゲームの拳酒が始まっちゃった。

六！七！八！九！ で四連勝、

ご破算に払って次の一拳、いざ勝負！

え、拳はやめたって？ で、踊るの？ え、扇で拍子を取って

あんた、唄うちゅーのか？ 皆、いいかげんだなあ。

賑わう隅田川の川面は、これぞ真の江戸の花というもんだ。栄える將軍さまの御代は、実に目出たいものだなあ。

平成三十年九月二十六日

竹芝乃比呂 拙訳

